

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 5 月 12 日現在

機関番号：25501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00018

研究課題名(和文) 自然変化の倫理的考察 カント主義的観点からのアプローチ

研究課題名(英文) Ethical Consideration on modification of nature. An approach from kantian viewpoint

研究代表者

桐原 隆弘 (Kirihara, Takahiro)

下関市立大学・経済学部・教授

研究者番号：70573450

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：ハーバーマスの類倫理構想(「自己存在可能性」のための出生時の生物学的条件の偶然性と不可処分性)はF・G・ユンガーの「不可侵の基体」としての自然観と、自然の改変可能性を主張するクヴァンテの立場はマルクスの「類の自己実現手段」としての自然観と共通する。カントにとって「人間性/人類」(Menschheit)概念は生物的特質ではなく、将来にわたり実現・完成すべき文化的課題であり、この自然/文化二元論は人格自律論と並びハーバーマスの類倫理構想を支える。これに対し、ヘルダーの「言語使用による本能の代替」論は、自然と文化の質的相違と全体連関への別の見方を示し、自然改変論にも新たな展望を開く可能性がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自然改変の倫理的正当化、およびその限界をめぐる問いに、現代の英米独の論考に即して取り組むという当初計画は、前回科研の延長でユンガー/マルクス比較、さらにヘルダー言語起源論・歴史哲学論に関心を移したため、部分的にしか達し得なかった。とはいえ、現代生命倫理におけるハーバーマスとクヴァンテとの対立点を各々の自然観に即して明確にし、かつ、新たにヘルダーの「本能と理性のトレード・オフ」論という哲学的人間学で受け継がれている思想を俎上に載せたことで、自然と文化の相違、自然的条件の改変可能性(不可能性)についてより深い知見を得ることができたと考える。当初の問いへの明確な回答は今後の課題である。

研究成果の概要(英文)：Habermas's concept of mankind-ethics (the contingency and non-disposability of biological conditions at birth for "self-existence") is similar to FG Junger's view of nature as an "inviolable base". Quante's position, which insists on the possibility of modification of nature, is similar to Marx's view of nature as a "means of self-realization as mankind." For Kant, the concept of humanity (Menschheit) is not a biological characteristic, but a cultural issue that should be realized and completed in the future. This natural/cultural dualism supports Habermas's ethical concept along with the theory of personal autonomy. Herder's theory of "substitution of instinct by using language", on the other hand, presents another view of the qualitative differences between nature and culture and the holistic connection of them, and may open up new perspectives on the theory of modification of nature.

研究分野：哲学

キーワード：類倫理 自己存在可能性 不可処分性 改変可能性 人間性/人類 自然/文化二元論

1. 研究開始当初の背景

既発表論文(「自然の隔離か自然の取り込みか? 文化の位置づけの観点から見たドイツ生殖医療技術論争」; 2016年、What is the virtue in biomedicine? A study through analysis of some types of philosophical argument against/for human genetic intervention; 2017年)において、ハーバーマスの類倫理構想を中心に、ビルンバッハ、サンデル、ブキャナン、ヨナスらの立場を論評したこと、およびそれとは別にカント社会哲学研究を重ねてきたことから、生命倫理研究とカント研究とを架橋することが今回の研究の動機であった。英米圏とドイツ語圏の生命倫理研究の比較研究の必要性も念頭にあった。

2. 研究の目的

ハーバーマスの「自己存在可能性」の思想はカントの「人格/物件」論および「人格の自律」、さらにはアーレントの「出生性」に由来する。これをカント自身の「人間性/人類」(Menschheit)概念によって補強することをはじめ、上掲既発表論文の哲学的基盤を探求すること、およびそれを通じて、生殖医療技術および遺伝子介入の是非をめぐる論争を中心に、「自然改変は倫理的観点から見ていかに正当化され得るか、またその限界はどこにあるのか」という問いに取り組むことを目的とした。

3. 研究の方法

文献研究、とりわけ比較思想的研究を中心とする。具体的には、F.G.ユンガーとマルクス(それぞれの相違と、ハーバーマスとクヴァンテとの相違の類似性)、カントと日本思想(「人間性/人類」をめぐる和辻、廣松との比較)、カントとヘルダー(自然/文化の二元論)を扱った。

4. 研究成果

(平成30年度)

「F.G.ユンガーの歴史哲学 自然観と経済秩序論の観点から、マルクスとの比較を通じて(1)(2)において、ユンガーによる技術文明への存在論的探究をマルクスの資本主義経済批判と比較した。自然観(相違点;人間の経済活動のための不可侵の存在論的基盤/類としての人間の自己実現の手段、共通点;喪われた自然の回復)および経済思想(技術的合理性に対立し、長期的な採算性として理解されるユンガーの経済性概念と、マルクスの物質代謝論との類似性、所有と人間存在の自由との関係をめぐる共通の思想)の比較に基づいて、墮落史観/進歩史観という両者の相違にもかかわらず自然・人間本性の疎外の克服とその実現・回復が共通の歴史観として見出されると指摘した。また、ユンガーの「不可侵の基体」としての自然観と類似の思想が、現代の生殖医療技術論争においては、カントの人格/物件論およびアーレントの出生性概念に基づいて出生時の生物学的条件の偶然性と不可処分性を主張するハーバーマスに見出されること、およびマルクスの「類の自己実現手段」としての自然観がミヒャエル・クヴァンテに受け継がれていることを指摘した。

学会発表として先述のユンガー・マルクス比較論の草稿を報告した。

(令和1年度)

カントの人格・社会・人間性概念に関するドイツ語論文(Wie ist menschliches Zusammenleben moeglich? Ausfuehrungen zum Dialog zwischen kantischer Philosophie und der philosophischen Ethik in Japan vor allem in Beziehung auf "buergerliche Persoenlichkeit" und "Menschheit")を公刊した。市民社会論の文脈に即してカントの人格概念を再構成し、そのうえで日本の代表的な哲学者(和辻哲郎、廣松渉)におけるカントの人格・社会・人間性概念解釈の検討を行うことにより、「日独哲学対話」の呼び水とすることを目指した。その際、「人間性/人類」(Menschheit)概念がカントにおいては生物的特質としてはほとんど問われることがなく、もっぱら社会的・道徳的課題として理解されていることを確認した。カントにおいて「人間性」は、(それ自体としては種々の「強制」「自己強制」を含む)を同時に不可避とする)市民社会秩序および個人の自発的な義務遵守(能力発展/慈善行為)、さらには趣味判断に見られるような自然発生的共通認識を通じて、類と

して実現・完成されるべき課題であった。ユルゲン・ハーバーマスは、こうしたカントの歴史哲学構想を念頭に置きつつ「類倫理」構想を展開し、「自己存在可能性」が人類の生物学的に不変な(介入・変更し得ない)特質を基盤として初めて成り立つとした。これは生命倫理の文脈におけるカント的人間性概念の修正であると理解し得る。

(令和2年度)

「人間的自然と歴史へのまなざし ヘルダー言語起源論とカント歴史哲学」および「ヘルダーの形態学的-経験論的人間観 『人類史の哲学への諸構想』から『純粹理性批判の批判』へ」において、おもにヨハン・ゴットフリート・ヘルダーとカントとの比較を通じて「人間的自然」の諸条件を解明した。前者では、ヘルダーの『言語起源論』に注目し、人間のもつ感覚(五感)の構造に根差した言語起源説およびそれを土台とした歴史の「自然法則」論を検討した。「自然法則」(群居性・類的発展・民族的個性・人類の単一起源)の提起を通じて、ヘルダーは、作術本能の欠落を補いその広範囲(自己に関連する世界全体)におよぶ活動能力を飛躍的に高めるのが理性使用・言語使用であると述べ、身体性を備えた身体構造の一環として理性を捉えている。カントがのちに、理性能力を「自然素質」として歴史発展のなかで捉え直そうとしたのは、ヘルダーの論考に影響を受けた面があるといえそうだ。

後者では、ヘルダーのライフワーク『人類史の哲学への諸構想』およびそれへのカントによる批判的書評、さらにそれへのリアクションともいえるヘルダーによるカント純粹理性批判への批判を取り上げた。本稿ではヘルダーの哲学的人間観をゲーテの自然観と英国経験論を統合する志向を示すものと捉えて「形態学的-経験論的人間観」と称した。その要点として、本能と理性のトレードオフ関係を、発生論的・連続的ではなく種別上の相違を強調しつつ、なおかつ人間の生の経験的事実に根ざしつつ解明しようとした点、および、本能が全般的に備わりつつも動物ほど集中的・強靱でないところを、理性と言語使用、さらには共同体における協力関係が補うことで、人間が人間としての歴史の歩みを進めていくという見解としてまとめた。

(総括)

ハーバーマスの類倫理構想(「自己存在可能性」のための出生時の生物学的条件の偶然性と不可処分性)はF・G・ユンガーの「不可侵の基体」としての自然観と、自然の改変可能性を主張するクヴァンテの立場はマルクスの「類の自己実現手段」としての自然観と共通する。カントにとって「人間性/人類」(Menschheit)概念は生物的特質ではなく、将来にわたり実現・完成すべき文化的課題であり、この自然/文化二元論は人格自律論と並びハーバーマスの類倫理構想を支える。これに対し、ヘルダーの「言語使用による本能の代替」論は、自然と文化の質的相違と全体連関への別の見方を示し、自然改変論にも新たな展望を開く可能性がある。

自然改変の倫理的正当化、およびその限界をめぐる問いに、現代の英米独の論考に即して取り組むという当初計画は、前回科研の延長でユンガー/マルクス比較、さらにヘルダー言語起源論・歴史哲学論に関心を移したため、部分的にしか達し得なかった。とはいえ、現代生命倫理におけるハーバーマスとクヴァンテとの対立点を各々の自然観に即して明確にし、かつ、新たにヘルダーの「本能と理性のトレードオフ」論という哲学的人間学で受け継がれている思想を俎上に載せたことで、自然と文化の相違、自然的条件の改変可能性(不可能性)についてより深い知見を得ることができたと考える。当初の問いへの明確な回答は今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 桐原隆弘	4. 巻 第62巻 第2号
2. 論文標題 F.G.ユンガーの歴史哲学 自然観と経済秩序論の観点から、マルクスとの比較を通じて（1）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 下関市立大学論集	6. 最初と最後の頁 pp. 49-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 桐原隆弘	4. 巻 第62巻 第3号
2. 論文標題 F.G.ユンガーの歴史哲学 自然観と経済秩序論の観点から、マルクスとの比較を通じて（2）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 下関市立大学論集	6. 最初と最後の頁 pp. 39-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 桐原隆弘	4. 巻 第64巻 第1号
2. 論文標題 人間的自然と歴史へのまなざし ヘルダー言語起源論とカント歴史哲学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 下関市立大学論集	6. 最初と最後の頁 pp. 41-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桐原隆弘	4. 巻 第64巻 第2号
2. 論文標題 ヘルダーの形態学的-経験論的人間観 『人類史の哲学への諸構想』から『純粹理性批判の批判』へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 下関市立大学論集	6. 最初と最後の頁 pp. 85-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 桐原隆弘、今井敦、中島邦雄
2. 発表標題 フリードリヒ・ゲオルク・ユンガーの技術論 『技術の完成』を中心に
3. 学会等名 社会思想史学会大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Michael Quante / Hiroshi Goto / Tim Rojek / Shingo Segawa (Hg.)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 mentis Verlag	5. 総ページ数 327
3. 書名 Der Begriff der Person in systematischer wie historischer Perspektive: ein deutsch-japanischer Dialog (執筆分担; Takahiro Kirihara, Wie ist menschliches Zusammenleben moeglich? Ausfuehrungen zum Dialog zwischen kantischer Philosophie und der philosophischen Ethik in Japan vor allem in Beziehung auf "buergerliche Persoenlichkeit" und "Menschheit", S. 31- 49)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------